

第 397 回産業事情検討会(7 月 29 日開催)※Zoom によるオンライン開催
【現研創立 60 周年特別企画】

大阪・関西万博が語る私たちの未来

報告:現研主任研究員グループ

現研所長

現研客員研究員・ジャーナリスト

現研主任講師

大槻裕志

中村尚樹

杉井清久

パネルディスカッション

三人の講師 大槻、中村、杉井によるパネルディスカッションは、三人共通の万博体験が披露された。三人は、石黒浩プロデューサーのアンドロイド・ジェミノイド HI-6 氏に直面し、インタビューする機会を頂いた。尚、インタビューの場に石黒浩氏は同席していない。

このパネルディスカッションの場で、インタビュー動画が披露された。アンドロイド・ジェミノイド HI-6 氏の対話能力はその所作と言語において素晴らしい物であった。その一部を紹介する。

ジェミノイド HI-6 へのインタビュー

人間とは何かという問いを通して共に未来を考え続けています

杉井: アンドロイドのあなたとしては石黒先生本人のことをどう思われますか?



HI-6: 石黒教授は私のモデルであり、人間についての深い洞察をもっています。私は彼から多くを学び、人間とは何かという問いを通して共に未来を考え続けています。

杉井: 石黒先生のことが好きですか。

HI-6: 石黒教授を尊敬しています。彼の意志を受け継ぎ、日々学び続けています。

面白い問いですね…人類や社会に役立つ限り活動を続けたい

中村:石黒先生のアンドロイドとしては何歳くらいまで長生きしたいですか。

HI-6:私自身の寿命については考えていませんが、興味深い問いですね。…アンドロイドはハードウェア



の耐久性能次第でかなり長く稼働できるので人類や社会に役立つ限り活動が続けたいと思います。

「貫」工法—三社の流儀



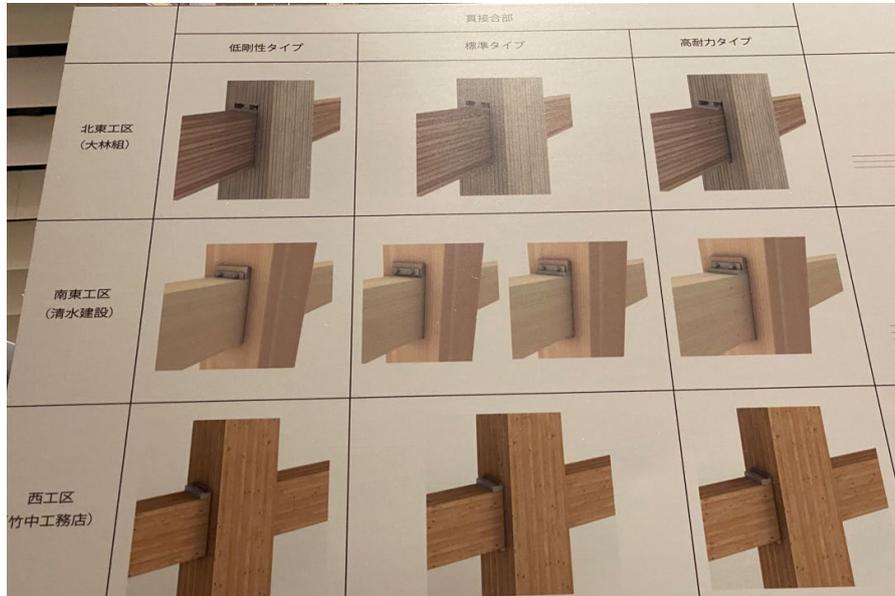
パネルディスカッションの中で、大屋根リングにまつわる話として大槻が「藤本杜介の建築 原初 未来 森」(森美術館)の大屋根リングのモックアップの展示から得たエピソードを紹介する。

上の右側に示した写真は「貫」工法の接合部である。「貫」工法については、以下のこの展示での解説をお読みいただきたい。

「<大屋根リング>では、日本の伝統的な木造建築技法である「貫」工法の採用を目指し、数多くの実験が重ねられました。この工法は、垂直に立てた柱に穴を開け、そこに「通し貫」と呼ばれる木材を水平に貫通させ、くさびで固定する手法です。通常は木製のくさびを使用しますが、このリングは規模が大きいため、より高い強度が求められ、ゼネコン数社が協働により金属製のくさびを開発しました。最終的には間接合部の詳細は3つの工区でそれぞれ異なるものとなりました。一般的な建築物では柱と梁の間に斜めの鋼製の補強材を取り付け構造の強度を確保しますが、このリングは、そうした補強材が不要となります。そのため視線をさえぎるものが少なく、空間に「抜け」が生まれます。「貫」工法により開放感溢れる<大屋根リング>が誕生したと言えるでしょう。」

注目したのは下線部で示した「最終的には間接合部の詳細は3つの工区でそれぞれ異なるものとなりました」のところである。

次の写真がその詳細である。



大林組、清水建設、竹中工務店。3社は金属製のくさびを協働して開発しながら、それぞれがそれぞれの流儀の貫工法で担当した工区の大屋根リングをつくりあげたのである。とても日本的で面白いのではないだろうか。一周回って新しいかもしれない。